

病床述懐

如来は法界の正しい良心である。これを智慧という。衆生の良心は迷妄そのものである。信心とは、如来の智慧光、衆生の心になりきって、その全情意となり、理性となりたもうことである。

されば、念仏の子とは法界の正しい良心を生きる人である。かるが故に信心のみが清浄といわれ、真実といわれる。されど念仏の子にも八万四千の煩惱がある。如来はこれを咎めたまわず。ただ一生相續して念仏不退なるものは、法界の良心を良心とし、如来の真実を真実として生きるが故に、等正覚の菩薩と讃えられるのである。

世尊聖人が万人の親となり、その崇敬を一身に集めたもう所以は、法界の良心を良心として生きたまうが故である。世の極悪極苦を見聞して法界の良心南無阿弥陀仏を頂ける、身の幸を思うこと切実である。(八、三)

本気になつて念仏申せ、しかし、本気になつても本気になつても、心が本気になつてくれない。本気になろうとすればするだけ、妄念妄想が出てくる。それでこそ本願の正機である。

きれいな心をあてにするな。きたない心を気に病むな。よろこんだのも駄目、よろこばぬのも駄目、ただ本願の力強さに気がついて、機の善し悪しを捨てて念仏するのが、本気になつて念仏するということである。

今一度言わせてくれ。お浄土まで念仏が相續するということ、これが一番大事、これがお他力である。撰取不捨である。(八、五)

老病死より外、何ものも持たないこの私と、永遠常住なるみ仏と、一体になりきるのが信の世界である。それは、私になるのではなくて、南無阿弥陀仏が私になりきつてくださるのである。だから手放して念仏申せるのである。私になりきつて下さるお慈悲の中で、身も心も投げ出して南無阿弥陀仏。煩惱業苦は南無阿弥陀仏のお宿である。

あなたの御意ごいはどうなのか。あなたの真意はどうなのか。師の御意はどうなのか。それが私のたった一つの永遠の問題である。それを忘れると名利が心のすわりとなつて、ご恩を尻の下に敷く。

若き教育者よ、御身はこの世の自然の泉でなくてはならぬ。自然の浄土はその水源である。

教育者であることに最大の喜びと、最深の悲しみを発見することが出来た日、この人は人間として本質的な自覚に入りはじめ、真の人生に生きはじめるであろう。

宿命を転じて使命に生きること自由という。これを横超という。(八、六)